



これからの 情報処理学会

連載を終えて

川合 慧
前田 英作

放送大学／会誌編集長

NTTコミュニケーション科学基礎研究所
会誌編集委員

おおよそ1年間にわたり情報処理学会役員の方々に寄稿していただいた連載「これからの情報処理学会」は、本512号をもって終了となる。そもそもこの連載は次の2つのことが契機となって企画された。

第1に、学会誌が昨年10月に500号の節目を迎え、今年の10月には512号という情報学的な意味でのもう1つの大きな節目を迎えることである。学会誌とはいえ、1つの雑誌が息長く発行を続けていることの価値は少なくなく、歴代の編集長、編集委員をはじめとする会員諸氏による尽力の結果でもある。それに報いる意味でもこの節目に相応しい企画を模索していた。

第2に、日経コンピュータ2006年1月23日号に「IT関連学会の憂鬱」と題する記事が掲載されたことである。その記事では情報処理学会をはじめとする情報関連学会のあり方について問題提起がなされていた。土井副会長による本号の連載記事にも記されているように、この批判に応えるべく、理事会等での議論を踏まえさまざまな施策が実際に実施された。しかしながら、このような学会の動きを正しく把握していた会員は、必ずしも多くはなかったと思われる。こうした時にこそ、学会役員から会員に対して学会運営に関する強いメッセージが発せられるべきであると考えた。

こうした状況を踏まえ、これからの情報処理学会のあるべき姿を役員皆さんの自ら語っていただくというのが、この連載の主旨であった。学会Webページには役員就任時の抱負が掲載されている。こうした役員就任前の抱負と就任後の経験とを踏まえながら、学会が抱える課題とその解決策とを自由に執筆してください、というお願いをさせていただいた次第である。幸いにも本企画は理事会で承認され、2006年度、2007年度役員(会長、副会長、理事、監事)のほぼすべての皆様から熱意あふれる文章を頂戴することができた。次のページに、13カ月24本にのぼる各連載記事のタイトル、執筆者、主なトピックを再掲する。

この中で特に、連載第1回の安西前会長による記事は、初回に相応しい大変力のこもった内容であり、それ以降の連載に大きな影響を与えた。また、本号に掲載した佐々木現会長による記事は、それまでに連載された記事内容を踏まえた内容となっていて、上手に連載を締めくくっていただいた。

改めて1年余にわたる連載を振り返ってみると、連載で提示されたさまざまな視点からの現状分析と提言は、どれも示唆に富んでいて今後さらに議論を深めていくべき内容である。それらをあえて大きく整理すると次のよ

- 1: 「これからの情報処理学会」(安西祐一郎 2006年10月号)
—新しい情報社会, 学会とは, これから進むべき方向
- 2: 「IPJSJ 2.0—フラット化する世界のコミュニティとしての学会像」(青山幹雄 2006年11月号)
—社会のフラット化, 学会によるコミュニティ作り
- 3: 「情報処理学会は学会活動でITを活用しているか? —学術情報発信の観点から」(今井浩 2006年11月号)
—大会, 研究会, 論文, 研究報告からのIT情報発信, 検索機能
- 4: 「21世紀社会におけるITの役割」(前田章 2006年12月号)
—IT逆バブル, ITについての学会, 学会への期待
- 5: 「選ばれる論文誌を目指して」(平田圭二 2007年1月号)
—論文誌についての考察, 提案, 論文誌改革, 財政
- 6: 「産学連携と情報処理学会」(阿草清滋 2007年1月号)
—学会は学術面での産学連携の要に
- 7: 「IT実務者への展開—英国学会に見る産学活動とビジョンより」(平川秀樹 2007年2月号)
—ケーススタディとしてのBCSの成長, 組織・会員制度・マーケティング
- 8: 「地方のための情報処理学会」(石田亨 2007年2月号)
—東京集中, 地方重視を, 地方限定研究会の提案
- 9: 「社会に存在感のある学会として—幅広い立場からの情報教育支援を—」(富田悦次 2007年3月号)
—国際情報オリンピック, 著者と社会人に夢を, 日本情報学会はいかが
- 10: 「学会が社会にできること, 社会が学会にできること—多難な時代の情報処理学会のあり方」(村山優子 2007年3月号)
—情報技術の光と影, 学会の自覚, 社会からの支援
- 11: 「技術者教育評価における情報処理学会の貢献」(萩原兼一 2007年4月号)
—情報系学科の不人気, JABEEの話, 大学院のアクレディテーション
- 12: 「IPJSJからJをとろう」(水野忠則 2007年4月号)
—"J"と国際活動, 国際会議主催時の問題
- 13: 「学会の集合知」(松井くにお 2007年4月号)
—知の集合, 集合の知, 知の足跡としてのCGM, ITフォーラムの設立
- 14: 「情報処理技術者の地位の向上を目指して」(旭寛治 2007年5月号)
—アメリカのPE制度とACMの否定的意見, 実務の重視, 地位向上
- 15: 「通信する情報と処理する情報」(中島秀之 2007年5月号)
—キーワードは処理と社会, 通信の役割とは, 学会の再構築
- 16: 「若手が動かす学会へ—事例研究と将来展望—」(中島浩 2007年6月号)
—役員の年齢構成とその推移, 若手に働いてもらおう, まず会員増
- 17: 「社会, 企業に影響ある研究を育てよう」(長谷川亨 2007年6月号)
—議論の場の提供, 標準化への取組み, 学会誌に企業企画を
- 18: 「国際担当の目から見た学会改革」(安信千津子 2007年7月号)
—IEEE-CSやIFIPとの協調, 学会の改革方向とさまざまな取組み
- 19: 「ディペンダブル情報社会へ」(坂井修一 2007年7月号)
—ディペンダビリティと学会, ディペンダビリティ向上の方策
- 20: 「実務家から見た情報処理学会」(玉置政一 2007年8月号)
—"実務家のニーズ"とは何か, 情報提供と支流の場
- 21: 「バランスのとれた楕円構造を目指して」(調重俊 2007年9月号)
—会員減少の分析, 技術者の成長と認定の支援, 社会的地位の向上を
- 22: 「そこに情報処理学会」(勝山光太郎 2007年9月号)
—学会の電子化, 学会のSaaS, ちょっと理想像
- 23: 「ものいふ学会へ」(土井美和子 2007年10月号)
—学会の存在感, ことばを発し力を発揮する, 男女の活躍
- 24: 「創立50周年に向けて」(佐々木元 2007年10月号)
—情報通信産業と学協会, 研究者と学会, 人材育成

うになる。

まず第1は、誰のための学会か、という学会の役割に関するものである。これは、情報処理学会の会員が、研究者、教育者と実務家とに大別される中で、今後の学会は誰のためのものであるべきか、という学会の存立理由の根幹にかかわる問いでもある。英国、米国における情報系学会との比較分析もされている。この問題は、学術的研究と実社会とのかかわりはどうあるべきか、という議論にもつながっている。

第2に、学会の情報化に関するものである。これは、青山理事による「IPJSJ 2.0」というタイトルに象徴される。IT技術が新しい社会基盤を先導し、世の中のさまざまな仕組みが変わりつつある中で、会員サービスをはじめとした学会の情報基盤はそれを十分活用しているか、という問題提起であった。これは、論文誌のあり方にも関連する問題であるし、より大きくは学会の財政基盤をいかに維持するかという問題にもかかわる。

第3に、学会の国際化に関するものである。これは、水野理事による「IPJSJ から J をとろう」というタイトルに象徴される。国際的基準に照らした学会のあり方を問うたもので、恐らく第1の、誰のための学会か、とい

う論点とも関係する。一方で、国内に目を向け、地方のための学会についての指摘もある。この「国際化」と「地方」の2つの問題は、視線は一見逆を向いているが、世界の中の地方としての日本、と言う見方をすれば、実は同じ問題に帰着するのかもしれない。さらに、前述の「学会の情報化」がこの問題を解決する上で欠かせないものとなるであろう。

また、以上の3つの論点には必ずしも属さない重要な指摘、論点、提言もあったことも申し添えておきたい。

今回の連載の中で提示された分析や提案が、今後の学会運営の中で建設的に議論され、創立50周年に向け具体的な施策として実際に実現されていくことを強く期待する次第である。また、「これからの情報処理学会」のために、会員相互の情報交換、意見交換の場でもある学会誌「情報処理」が担うべき責務も少なくないことは、言うまでもない。

最後に、大変お忙しい中、本連載の主旨をご理解いただき、ご寄稿いただいた、学会役員の皆様に改めて心よりお礼申し上げます。

(平成19年8月30日)

